

昭和を送り平成を迎えて

日本熱測定学会会長  
東北大学選鉱製錬研究所教授 矢澤 彬



会員の皆さまには、おすこやかに1989年の新春をお迎えることと存じます。

本学会は実務的な運営のために年に数回の幹事会を開いておりますが、新年早々には編集委員会と一緒に泊り込みで会議を持つのが慣例になっております。本年も1月6日にこの会合を持ち、終了後、夜半遅くまで学会運営にまつ

わる雑談に花を咲かせましたが、思いもよらず翌朝ホテルの食堂のテレビで天皇崩御のニュースを聞くことになりました。傾いた太陽がやがて西山の端に沈むのと同様に、昨年の秋以来、時間の問題と判ってはおりましたが、大正15年(昭和元年)に生まれ、昭和の興亡をつぶさに体験して来た一人として、あらためて感慨ひとしおのものがありました。子供の目には輝やかしくまぶしく見えた太陽が、たちまち戦乱の暗雲に覆い隠され狂瀾に消されるかと観念した命を生き永らえたあと、思いもかけず以前に倍して光り輝やく太陽の恩恵に浴した昭和。それが今、目の前で燦然たる光芒を放ちながらゆるゆると姿を横たえ山の端に隠れてゆく。大多数の日本人が愛惜の念をもって昭和の幕が引かれるのを見護ったのではないのでしょうか。

しかし、陽はまた昇る、とか、いま私どもは平成元年の朝を迎え、ためらいがちに近づいて来る新しい時代に期待をかけ、その名のように平和でサクセスフルな環境の中で、自分の職務に最善を尽くせるよう願っております。

それにしても昭和は62年余、永い歳月でした。私の専門分野での熱測定と言えば、昭和初期には相平衡図を造るための単純な“熱分析”程度でした。敗戦前後の焦土、飢餓、貧困の中で学生生活を送った私どもには、当時、本多式熱天秤というのが、高温反応を追跡する上で、極めて有用な装置でした。齋藤安俊東京工業大学工業材料研究所所長のご父君、齋藤平吉博士が、本多光太郎先生の指導の下に改良完成した装置で、今からみると大変なしろものではありましたが、コンクリート実験台一つを占めた装置と徹夜で戦ったことを懐しく想い出します。最近、ほんの机一つの大きさに多機能の熱測定機構から自動操作、解析機能まで組み込んだ装置を見ると、ここは

んの40年間の科学の進歩が、敗戦時のどん底から世界の債権国にまで発展した日本の姿と二重写しになって、世の中の進歩に畏怖の念すら覚える次第です。こと熱測定に関しては、ここ四半世紀の間に本学会の先達の方々の果たした役割は誠に大きなものであったと申せましょう。

話を現実の学会運営に戻し、昨年の本学会の活動を振り返ってみますと、7月に京都で熱測定講習会、ワークショップを開き、大変好評でした。また10月3日から5日にかけて第24回熱測定討論会が東京工業大学で開催され、甚だ盛会でした。その他、各種委員会等も活発に活動しており、これら各行事に献身的なご尽力を賜った各位に厚く謝意を表す次第であります。

本年の行事につきましては冒頭に記しました幹事会で内容固めが行われましたが、今年は熱測定討論会が25回記念ということで10月31日から11月2日にわたり大阪大学で開催されます。記念行事としてかなりの数の外国人招待講演が予定されており、またバイオカロリーを主題としてミニシンポジウムを国際会議的に行う予定です。編集委員会の方では、本誌「熱測定」のNo.4を記念特集号とすることで企画が進められています。また時期はややずれますが、1990年春、大阪で開催予定の第2回日中熱測定シンポジウムも、25回記念事業の一環とすることが了承されました。これらの他にも、本学会が長期的展望をもって対処すべきプロジェクトが議論に上っており、なお広く会員皆様のご意見も伺いながら、実現をはかりたいと考えております。

恒例となっている熱測定講習会、ワークショップは、本年は2回の計画が有り、第1回は会告等でご覧のとおり2月20日～22日東京で、ということで既に準備が整っております。2回目の講習会は7～8月頃大阪地区を予定しておりますが、ワークショップの2回目は東京、京阪地区以外の地方でということで、仙台で試行してみることになりました。

このほか各種委員会の活動や国際協同的な寄与も愈々活発化しておりますが、これらもろもろの事業の遂行に事務局が非常に熱心に協力して下さっております。本年は25回記念事業もあり、熱測定振興会の方にも一層お世話になることと思います。各方面からの支援を戴き、円滑に本学会の運営が果たされるよう願っております。

おわりにあらためて皆様のご健康とご発展をお祈り申し上げます。年頭のご挨拶とさせていただきます。